

## (2) ふるさとのちょっといい話

### シルビア号から届いた感謝状

(丸亀市 広島)

瀬戸内海に浮かぶ広島には、少し変わった遺跡が残されています。丸亀からの定期船が着く江ノ浦にあるイギリス人士官レキの墓がそれです。このレキの墓にまつわる話は、幕末の江戸時代にさかのぼります。

慶応二年（一八六六年）十一月、イギリスの海軍の軍艦シルビア号が瀬戸内海で測量を行っていました。しかし、不幸なことにこの瀬戸内海での任務の途中、乗組員だったレキ士官が病に倒れ、広島沖で亡くなってしまいました。

シルビア号の艦長を始めとする乗組員一同は、やむを得ずレキ士官の棺をともなつて広島島の江ノ浦の海岸に上陸し、レキの棺をうめました。そし



て、盛り土の上に十字架の墓標を建て、帰っていったのです。その当時、シルビア号の艦長や乗組員が上陸したときの様子を見ていたおばあさんが、「鉄砲を持った異国人たちが、遺体をついでムカデのような船で上陸した」と、話していたことが伝えられています。

こうしてシルビア号の乗組員の手によって、とむらわれたレキ士官の墓ですが、島の人たちの間で墓標の十字架が問題となりました。

というのも当時の日本では、キリスト教は異教徒とされ、その布教はもちろん、十字架をかかげることも許されてはなかったからです。異教徒への取締まりは大変に厳しいもので、レキ士官の墓標である十字架もキリスト教の象徴と見なされ、見つかるやいなや役人の手によって取り外され、焼き捨てられてしまったのです。

この様子を見ていた大変純朴な島民たちは、墓標もないまま異国の地に眠るレキ士官を哀れに思ったのでしよう。レキ士官の霊をなぐさめるために、「長谷川三郎兵衛之墓」という日本風の名前を付け、墓標を建てて手厚くとむらいました。

それから二年後、時代は明治へと変わりました。レキ士官の墓のある広島江ノ浦に、岡良伯という人物がすんでいました。

岡良伯は、医師で、その地域の庄屋でもありました。彼は、「長谷川三郎兵衛之墓」が、イギリス人のレキ士官の墓であることを忘れてはいませんでした。「長谷川という異国名ではレキ士官の霊も安らかに眠ることはできないだろう」と、岡良伯は思ったのです。

そこで、明治元年（一八六八年）、新たな墓石に「英国士官レキ之墓」とレキ本人の名を刻んだ立派な墓を建て、あらためてその霊をとむらったのです。

時は移り明治二十九年（一八九六年）、シルビア号が再び、広島江ノ浦の近くを航行したときのことです。このときのシルビア号の艦長は、昔、レキの同僚士官だったジョン艦長でした。彼は、旧友をしのぶためシルビア号の乗組員一同を連れて再び広島江ノ浦の海岸をおとずれることにしました。広島に上陸した彼らが目にしたのは、立派な石碑にたくさんの供物や美しい花が供えられたかつての

仲間の墓でした。まさかこのように手厚くとむわれているとは思ってもよらなかったことでした。ジョン艦長をはじめ乗組員は、皆一様に驚き、島の人達の温かい気持ちに感激したそうです。

そして、シルビア号が帰国した後、イギリス公使館を通じて、広島の人たちにジョン艦長から、次のような感謝状が送られてきました。

一八六六年、この地にほうむられたイギリスの海軍将校の墓を  
当時お世話になり、保護してくださった、貴下および広島住民の  
方々のご好意、ご親切に対し、厚く御礼を申しあげます。

一八九六年十一月二十九日  
シルビア号にて エイチ・シー・エス・ジョン

「伝えたいふるさとの100話」財団法人地域活性化センターより



この話には、博愛と思いやりにみちた地元の人々の豊かな心があらわれています。私たちの郷土、香川の美談として、これからもずっと語りついでいきたいですね。